

教務だより

2015年5月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

勉強をやめたくなくなったら読むページ おけいこごとの基本

茗溪塾塾長 宇野 雅春

小学校一年生から四年生までの四年間、私は二歳上の兄と一緒にバイオリンを習わされました。音楽とは、ほとんど無縁だった父が、兄と私にバイオリンを習わせようと思ったきっかけは、ついに父が亡くなるまで聞かず仕舞でしたが、この四年間の経験が今でもときどき思い出されます。それは、私の人生にとってとても大きな意味を持っていたように思えるからです。

バイオリンは、とても難しい楽器で最初の持ち方のあたりからとても腕が痛くつらいものなのです。しかもあの美しい音が出るまでの「ひどい音」ときたら…他の楽器と違い、とにかく音が「美しい」音になるまでが大変なのです。私より少し早くはじめた兄はめきめきと上達し、私が記憶するところでは、本当にほれほれするような、まるで「ラジオ」から（当時テレビはまだなかった）流れてくる音楽家の演奏に近いものでした。ところが、私のそれきたら、「やめて〜！」と言われても仕方がないような音で、実際中学生の頃、ふたたび取り出して弾いてみたときには、妹たちから真剣にやめてほしいと懇願された記憶があります。結局、練習も長時間は無理でほとんどしていませんでしたから、ただ通っているだけという四年間だったのです。

バイオリンの先生は、バイオリニストの辻久子さんと何らかの関係のあった先生で、優しくほとんど強制することなく根気よく見てくれたように思います。それなのに、なぜかあとから入ってくる子が、ことごとく私を追い抜いてどんどん上達していくのです。どうして自分が上達しないのか自分にわからないまま、いつしか私は「やめたい」と思うようになりました。

バイオリンの楽譜には番号がついていて、その番号の指をたどりながら弾くのですが、あるときパニックに陥りました。楽譜から番号が消えてしまったのです。ステップが上がったということなのですが、番号と指の位置しか頭にない私には、パニックをもたらす結果となったのです。それからは、先生の指をまねて、弾く日々になってしまいました。でも自分では、どうしていいのかわからないのです。物まねで弾くには限界がありますから、どんどん興味も失せていきました。おかげで親たちは、「この子はダメだ」という結論にいたったようです。

その後の長い人生で、兄は親の期待を一身に背負っていきましたが、私はこの頃から親の期待の対象ではなくなってしまったので、のびのびと干渉されずにすんだような気がします。四年生のときに、ついにバイオリンをやめてもいいよと親に宣告されました。当然、うれしくて喜んだと思うのですが、その後あることが起こります。

学校である日の音楽の時間だったと思います。「音符」をはじめて習ったのです。このときの私の驚きは、今でも心に刻み込まれているのですから、かなり大きかったと思います。「何だそうだったのか……」自分が先生の指をまねながら、弾いていたことのばかばかしさをはじめて知ったのです。音符の意味さえつかめば、先生に習わなくても自分で弾けるということ。自分を追い抜いていった生徒の顔がいくつか浮かびました。これを知っていたら、負けなくてすんだのにと……。

このことは、高校時代「音楽」に心惹かれるようになって、なおさらに悔いとして頭をもたげてきました。「あのとき続けていたら」。あとちょっとのところ、何か大きなものを捨ててしまったように思えて仕方ありませんでした。簡単なことなのだけれど自分が自覚して解決にいたるまで、私にはたくさんの歳月が必要だったのかもしれません。

自分の「子育て」のなかで、私は四人の子どもにピアノを課しています。嫌がる子もなかにはいますが、「中三」まではどんなことがあっても続けることを原則としています。費用もバカにならないのですが、「先のことはわからない」という私の経験が、その根本にはあるのです。（「合格への道しるべ」より）